

俳句通信

特別作品20句 本井 英「小園逍遙」

特集 〈いまどんな句が結社で詠まれているか〉

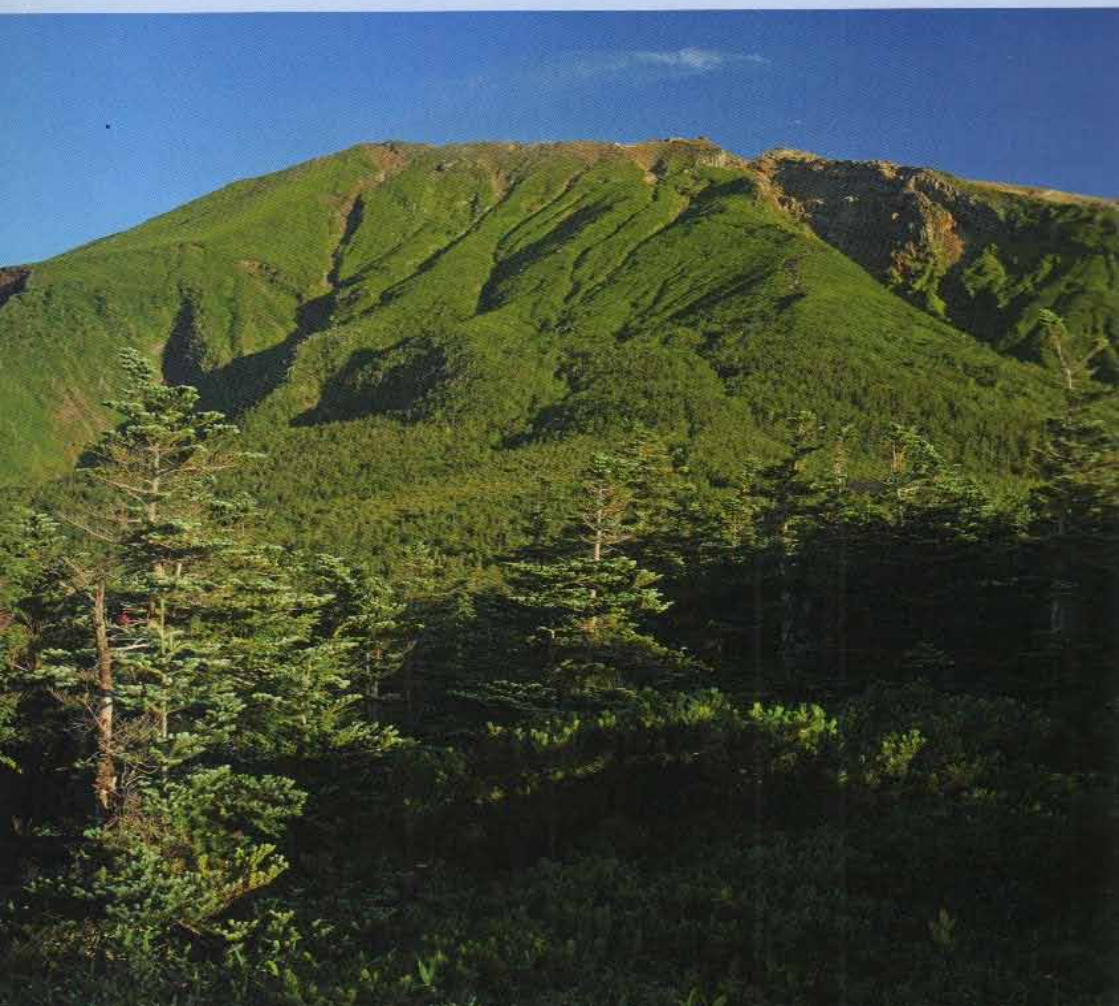
関	「コロナ下の俳句たち」	守屋明俊
運河	「『運河』の今」	山内節子
海原	「『人新世』を俳句で超える」	柳生正名
花鳥	「革新性をさぐりながら」	渡辺光子
山茶花	「いまどんな句が『山茶花』で詠まれているか」山内繭彦	
磁石	「命を伝える俳句」	依田善朗
都市	「新しみとは」	中西夕紀
ひまわり	「現代仮名遣いで自由に楽しく」	西池みどり
風上	「結社の理念に個性を加えて」	南 うみを
道	「感動する心を磨く」	田湯 岬
麦	「具象にして抽象」	滝浪 武
森の座	「先師求道の心を思いつつ」	小川雪魚
門	「大海原に出航す」	村木節子
雪解	「一物を詠む」	上田和生
予感	「同人作品の嬉しい刺激」	仲村青彦
陸	「私という人間」	大石雄鬼



作品／岸原清行・山中葛子・向田貴子・鈴木直充・長島衣伊子・佐怒賀直美・高田正子・津川絵理子・すずき巴里・鈴木太郎・神田ひろみ・津森延世・衣川次郎・山下知津子・こしのゆみこ・新海あぐり・清水和代・木暮陶句郎・佐藤映二・瀬戸清子・小俣たか子・中村幸子・木内恵子 ほか

木曾 御岳 8月

写真／樋口一成



鴟 高音 ふ た た び 三 た び 鴟 高音 星野立子



百舌鳥

猛禽類とは鷲や鷹の大型の鳥類で生態系の頂点だが、百舌鳥は小さくても猛禽である。トカゲや蛙、昆虫を主に捕食するが、雀などの小鳥も捕まえる事もある。

私が中学生の頃、メジロを竹籠に入れ軒下に吊るし、ガラス越しにスケッチしたり、ほおおっと眺めていたりした。ある日、突然鳥籠に何かが飛び込んで鳥籠が庭に転げ落ちた。庭に飛び出すと、逃げ出したメジロを百舌鳥が鷲掴みしていたが私を見て諦めて逃げた。

後、ヘラブナ釣りを始めるようになり真夏の暑さが和らぐ九月。早朝、釣具を担ぎ駐車場へ向かうと百舌鳥の鋭い鳴き声が澄んだ空気を突き刺すように聞こえる。これから秋冬を過ごす縄張り宣言らしい。

季節の変わり目を自然の中に感じ、俳句に多く読まれてきたが、私の一番の秋は百舌鳥の鋭い高鳴きである。

絵・文 杉原武弘

望の潮しづかに湛へ船留 大橋越央子



漁港 佐喜浜

徳島から高知へ。出入りのはげしい海岸線を南へ行ったところにある、水床隧道が阿波と土佐の境である。阿波の海から荒々しい土佐の海へ。自然の岩礁を上手に利用した小さな港がいくつか、そして佐喜浜漁港につく。写生の地的地である。はげしい風や波浪に備え高い擁壁をもつ港である。深いエメラルド・グリーンの水面に白い船体が美しい。かつをの一本釣りが盛んと聞く。海辺で生まれ育った私も少年時代、木で作った鯉の模型を釣り上げる練習をしたことがある。最近では船上で針がはずれるように改良された鯉を横抱きにする必要はないようだ。大群に遭遇して吊り上げる（入れ喰い）壮観さは筆舌にはつくせない。

絵・文 栢田 務

特別作品
20句

小園逍遙

本井 英

半夏生その一刷毛のはじまりし

仰ぐ薔薇見下ろす薔薇とありにけり

ちりちりと花穂もすでに半夏生

河骨の黄に赤手蟹ことしまた

河骨の水へと闇の解けそめし

特集

へいまどんな句が結社で詠まれているか

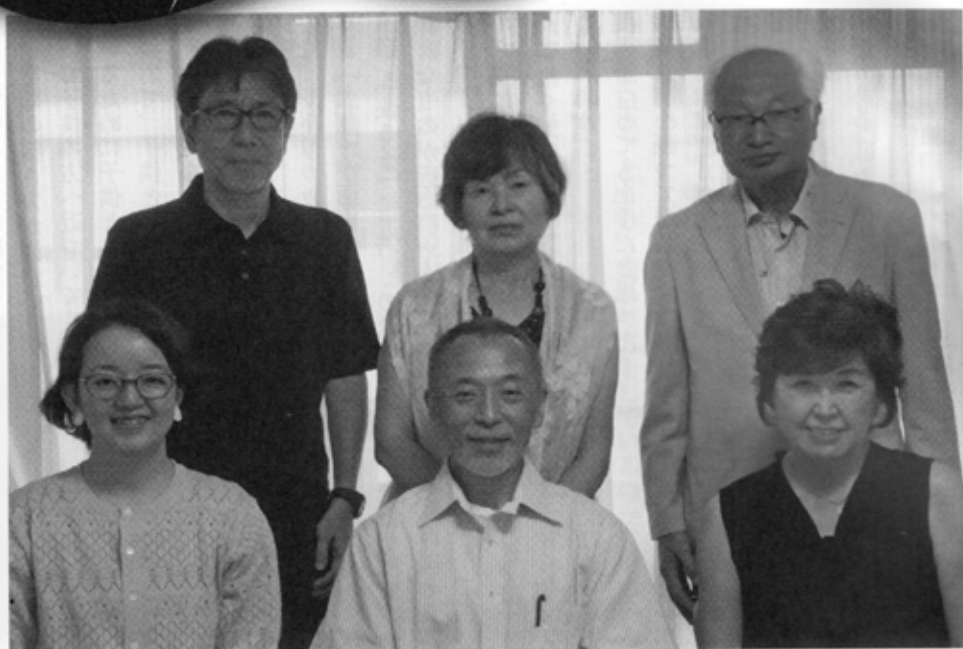
結社には、それぞれ理念・方向性があるようですが、いま現在どのような句が結社の中で詠まれているか、主宰・代表そして同人・会員などの句について、今回は16結社の方にお書きいただきました。

閨 運河 海原 花鳥

山茶花 磁石 都市 ひまわり

風土 道 麦 森の座

門 雪解 予感 陸



前列右から安田氏、望月氏、矢野氏
後列右から星野氏、藤本氏、山本氏

ゲスト 望月 周・安田青葉

矢野玲奈・山本 潔

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 本日の参加者は「百鳥」同人の望月周さん、「対岸」同人の安田青葉さん、「玉藻」「松の花」同人の矢野玲奈さん、「岬」主宰の山本潔さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いします。

高士 では始めます。今日の高点句は5点です。満票だから、作者は分かっちゃいますね。

眠る子に近づいてくる金魚かな

◎青◎葉◎美

青葉 面白い情景だなと思いました。赤ちゃんだと思うんですが、眠っている子供のそばに金魚鉢があつてそこに「金魚」が動いて回って来たときにその「金魚」が大きく見えるような感じが見えました。

潔「金魚」の動きがすごく分かる句。それをジッと見ている作者。「金魚」と子供の関係を観察している様子が面白いと思いました。

美和子 情景がよく見えることと、いろんな情報を詰め込んでいないということが好きでした。「金魚」が現実のものでありながら、眠っている子供の夢の世界を覗かせて